園長だより NO１０９

2025.2.4

子ども達の進級、卒園、まで、あと２か月あまりとなりました。　子ども達との生活は時が経つのがとてもはやいものです。先日、新幹線のドクターイエローが現役を引退するということをニュースで知りました。子ども達の育ち（成長）のスピードも新幹線に負けじと速度を緩めてくれません。しつかりと子ども達と向き合い、成長を心に記憶にとどめていきたいと思っています。

乳児保育で大切にしたいこと

冒頭で子ども達の成長ははやいものですと言いましたが保護者の皆様も実感していることではないでしょうか、つい先日、初めの一歩がでた子がいつの間にかトコトコと歩いてしまう、指さしができるようになると言葉がままならないが意思表示をする、目に入るもの次々と興味を示す、後期食を食べていた子が歯が生え咀嚼力が養われてくるとどんどんと食欲が増し喫食する形態が上がっていく、大人はどうでしょうか？ある時期から養われてきた力は平行線をたどる、ご飯を食べる時、咀嚼力が上がったなどと実感することは皆無である。普通に歩けるようになると安定した歩きだ、歩幅も均一で速度も上がったなどと思うこともない。　生活する上で当たり前のことに思いを馳せることもない。

子ども達はと言えば、自己の変化、様々な力の獲得に一喜一憂する。こんなこと、あんなこともできるようなる。人として生きていくための養いたい力がリスト化されていたら、何十万、何千万、もっとかもしれないが多くの力や行動の源となるものを獲得していくのだと思っています。

この世に命を賜り、誕生を祝福されて生まれてきた子ども達、限りなく愛情を注がれ生きている。

あんなことできる、こんなことできる

こんなことやりたい　あんなことやりたい

という意識、思いは　大人の何倍も持っていると思う。だから大人から見れば子ども達の成長は驚きであり目をみはるものがある。

過去の便りで子どもと関わる大人との愛着を取り上げたことあります。　つい先日、職員研修でも愛着について学んでいます。そもそも愛着を業界ではアタッチメントという。

子ども達は生まれながらに恐怖や不安を抱く機会が多い、見知らぬ人と目が合えば尻込みする。戸外にでて初めて芝生を歩いた瞬間に異様な感覚に泣き出すこともある。空腹を感じる、排泄時の不快感を感じる、子どもにとってはどれも不安であり、大げさではないが恐怖感を感じることもある。

そんなとき、寄り添う大人、家庭であれば母親、父親、おじいちゃん、おばあちゃん保育園であれば身近なクラス担任（園職員）が子どもの不安や恐怖を穏やかで優しい対応で取りのぞき心をリセット、立ち直らせてくれる、そんな存在があり子ども達は安心感、信頼感を抱き、寄り添う大人から離れ、好奇心を発揮し様々なものに触れたり、感じたりできる。その行為そのものが子どもの成長の源になっている。　不安や恐怖は乳児期～児童期になっても続く、年齢が高くなれば、その子の経験や人間関係において軽減や回避、時には乗り越えることもできるようになってくる。

アタッチメントは子ども達が不安、恐怖を感じたとき寄り添ってくれる大人がいること、一対一の関係で立ち直らせてくれる存在、特定の大人と感情の調整ができる。子ども（一人）の感情を二人の関係で調整することと言えます。

子どもにとって大切なのは不安や恐怖を感じた時に泣いたり、声を上げたりする、そんなときに　信頼できる大人のところに行けば守ってくれる、助けてくれるという安心感、安心基地（特定の大人）がいるんだという見通しが持てることが大切と思っています。

例えば

母親と機嫌よく散歩している。

すると犬の散歩をしている人と出会う。

「わんわんと吠えられる」　「ギャーと泣く」一目散に母親に駆け寄り抱っこされる。不安な気持ちを温かく優しく受け止められて泣き止み、感情が立て直される。

「大丈夫だよ」

「〇〇ちゃんとお友達になりたくて吠えてしまったのかな」

「もう吠えないよ。　大丈夫」

こんなことを繰り返し、感情の調整を二人でやっていく。

安心感の蓄積があり、心理的なつながりがあると世界を広げ、様々なことを吸収していくことに繋がります。

保育者も寄り添う大人として穏やかに常に優しく接していくことを心にとめながら子どもとのアタッチメント通じて「心の育ち」「心の土台」を作ることを共に歩みたいものです。

（おおぞら保育園　園長　廣部信隆　）